様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　８ 月 １７ 日現在

機関番号：１７４０１
研究種目：基盤研究(A)（一般）
研究期間：2016～2020
課題番号：１６Ｈ０１９７０

研究課題名（和文）水俣病事件の記憶術と（脱）アーカイヴ構築ー未来の人文社会科学的総合研究に向けて

研究課題名（英文）Mnemonics and (De)Archiving of the Tragedy of Minamata Disease: Toward Comprehensive Studies on Social Sciences and Humanities for Future Generations

研究代表者
慶田　勝彦（KEIDA, Katsuhiko）

熊本大学・大学院人文社会科学研究部（文）・教授

研究者番号：１０１９５６２０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　35,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の成果は、当初計画していた以上に進展した。第一に、＜水俣病＞事件アーカイブの構築に関して、熊本大学文書館と連携し、資料的価値が高い岡本達明資料、水俣病研究会資料、そしてチッソ関西訴訟関係資料の収集、目録作成、そして資料の一部を公開した。第二、水俣病研究会メンバーと共同し、＜水俣病＞事件研究に関する著作を３冊刊行した。第三に、上記２つのプロジェクトを通して＜水俣病＞事件に関する若手研究者や資料整理等の若手人材が新たに育成された。第四に、熊本大学文書館および同大学人文社会科学研究部附属国際人文社会科学研究センター（2020年度新設）に＜水俣病＞事件アーカイブのプロジェクトを創設した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の学術的および社会的意義は２つある。第一に、水俣病研究会と人類学、社会学、歴史学、政治学等の研究者との共同でこれまでの研究を継承するためのセミナー、シンポジウム等の開催や著作を刊行し、＜水俣病＞事件の歴史性と現代性について学術的かつ社会的に意義がある情報を発信した。特にセミナー等は一般公開を原則にし、刊行した著作も広く活用できる社会的意義をもたせた。第二に、＜水俣病＞事件に関する貴重な研究資料を若手の研究者やアーカイブ関係者と共同して次世代に継承するためのアーカイブズ空間と研究環境を整えたことである。これは熊本や水俣との地域・社会連携の一環として推進することで社会的意義をもたせた。

研究成果の概要（英文）：The achievements of this project are as follows. First, by collaborating with Kumamoto University Archives, we collected, listed, and arranged new noteworthy archival resources, such as the Tatsuaki Okamoto, Minamata Disease Study Group, and Chisso Kansai Lawsuit Collections, on the Tragedy of Minamata Disease. Second, with the cooperation of three members of the Minamata Disease Study Group, we published three books under Gen-Shobou Publishing, which focused on the social histories of the said tragedy. Third, through the abovementioned projects, we helped with the development of young researchers and archivists along this interest. Lastly, we established new related research projects in the Kumamoto University Archives and the International Research Center for Humanities and Social Sciences at Kumamoto University.

研究分野：文化人類学・地域研究

キーワード：＜水俣病＞事件　アーカイブズ　地域研究　文化人類学　社会運動　水俣病研究会　裁判・訴訟　社会史

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

本研究の開始当初の背景は以下の 3 つである。第一に、＜水俣病＞事件と歴史的に関係が深い熊本大学に勤務していたため、事件関係者が総じて高齢化し、学内においてもこれまでこの事件の研究を支えてきた研究者が次々と退職してゆくことで、事件研究ならびに事件関係資料が次世代に十分に継承されない可能性があるとの危機感である。もちろん、民間でも私学でも、研究資料が集約されて保管され、人びとに利用される環境であればどこでもよく問題ないのであるが、求心力がある人物の異動や環境の変化が資料保存に影響するリスクがあることがわかってきた。国立大学法人も完全ではないが、安定した長期資料保存の可能性は高まると考えた。研究を開始した直後の 2016 年 4 月に熊本地震が生じ、地域と深く関係する貴重な研究資料の保存は急務であると再認識した。資料管理を含む研究環境の次世代への継承、これが背景にあった。第二に、事件関係者の高齢化はこの事件研究の衰退の徴候とも一致していたため、再度ここで＜水俣病＞事件の研究とは何かを人文社会科学において歴史化し、新たな研究の方向性を模索する必要性を感じていた。なぜなら、日本の人文社会科学の専門性は細分化し、若手研究者の博士号取得は常識化しており、個々の領域での研究の質は高まったように見える一方で、分野横断的な研究や公共性、社会性が高い研究への関心は十分に発展しているとはいえず、それは公共性、社会性が極めて高い＜水俣病＞事件研究にも反映されていたからである。研究代表者は文化人類学、地域研究（特に東アフリカ・ケニア海岸地方）での研究実績を有しているが、理論や方法に関しては世界遺産や無形文化遺産、博物館・映像人類学、そしてポストコロニアル人類学の影響もあって、記録と記憶、ドキュメント、アーカイブズをめぐる理論と実践の具体的な事例を人類学や地域研究と節合してゆく方向性を模索していた。＜水俣病＞事件は人文社会科学における研究や知のあり方を根本的に問い続けている領域であり、また、人類学や地域研究にとっても従来のフィールドワーク経験から得られた知見に基づいて、記憶、記録、アーカイブズの観点からこの事件に関わることができるのではないかと考えた。第三に、＜水俣病＞事件に関連した地域や大学の特性を活かしたアーカイブズ研究の創設は、地域研究に関わる若手研究者や若手人材の育成を促進できる可能性があると考えた。そのためには熊本大学内にこのような研究プロジェクトを推進する拠点が必要だったが、文書館や図書館との連携の目処がたったので、この研究課題を大学内で円滑に進めることができるようになった背景がある。

２．研究の目的

本研究は＜水俣病＞事件を人文社会科学の最も重要な研究課題と位置づけ、＜水俣病＞事件の記憶を学際的に検討すると同時に、未来へと継承してゆくためのアーカイブ構築、研究環境の確保、改善を第一の目的としている。もちろん、これまでに＜水俣病＞については多様な研究がなされてきたし、ジャーナリズムにおいても＜水俣病＞患者の救済を焦点化した報道は現在でも継続している。その一方で、人文社会科学的な＜水俣病＞事件の総合研究は一部を除いて少なく、ほとんどが断片的な研究に留まったままである。本研究は＜水俣病＞との関係が深い熊本大学を拠点とした人文社会科学的な＜水俣病＞事件の記憶とアーカイブズに関する総合研究を人類学主導で実施する点、そして水俣地域の多様な機関との連携や若手の研究者や人材の育成を通じて＜水俣病＞事件の記憶を学術世界へと発信してゆく点で他に類をみない研究を目指している。

３．研究の方法

アーカイブ構築に関しては、1969 年以来熊本大学を拠点として研究を継続し、その評価も高い水俣病研究会メンバー（富樫貞夫、故丸山定巳、有馬澄雄、阿南ミツアキ、高峰武など）を中心として収集されてきた資料に加え、研究会メンバーの媒介によって可能になる独自の資料のアーカイブ構築を熊本大学図書館・文書館と連携して実施した。また、アーカイブ構築に関しては、広島大学文書館、水俣市水俣病資料館およびミナコレ、水俣病を語り継ぐ会などの関連グループ、水俣病センター相思社、ガイアみなまたなどからの協力を得た。研究に関しては、水俣病研究会と連携し、社会性、公共性が高い＜水俣病＞事件の歴史性について、一般公開を原則とした各種セミナー、シンポジウム、研究会等を主催し、主としてこの事件の社会史の側面を探究し、その成果は著作にする計画で実施した。セミナーには人類学をはじめ、社会学、政治学、歴史学、法学、医学等の研究者の参加を幅広く呼びかけ、分野横断的にこの事件への関心を高める方法をとった。若手の研究者や人材の育成は主として＜水俣病＞事件アーカイブ構築プロジェクトに位置づけ、博物館や各種資料館、文書館等での実践的な経験を中心として、資料の収集、分類、保存、公開等の一連の作業を各自が実施できるようにする方法をとった。国際化について、個人的には人類学、国立民族学博物館、文化遺産プロジェクトを中心に国際学会での発表等を行うと同時に、米国マサチューセッツ大学ボストン校（紛争解決学）との研究連携を大学の研究連携の一環として推進する方法をとった。

４．研究成果

アーカイブ構築に関しては、＜水俣病＞事件の社会史、民衆史で重要な著作を残している岡本達明のほぼ全資料と水俣病研究会が収集、蓄積してきた資料（特に訴訟・裁判関係）を本研究では主たる対象とし、音声テープの書き起こし、各種資料のデジタル化、目録作成を熊本大学文書館と連携して行い、その成果の一部は公開にいたっている（以下の URL を参照のこと。http://archives.kumamoto-u.ac.jp/newsLetter.html　http://archives.kumamoto-u.ac.jp/minamata.html）。この成果は本研究を通じて推進してきた＜水俣病＞事件、さらには免田事件、ハンセン病事件を加えた熊本地域に関係がある事件アーカイブズ構築とアーカイブズに関連した研究を中・長期のプロジェクトにしたことで可能になっている。また、本研究の成果は、新設（2020 年４月～）された同大学人文社会科学研究部（文）附属の国際人文社会科学研究センター・学際的研究資源アーカイブ領域（領域長は本研究代表者）の設置へと繋がっている（http://www.fhss.kumamoto-u.ac.jp/kokusai_jinbun/）。研究関係では、水俣病研究会メンバーによるセミナー、シンポジウム、そして研究会等を開催し、セミナーの成果としては富樫貞夫（水俣病研究会）『＜水俣病＞事件の 61 年：未解明の現実をみすえて』（2017 年、弦書房）、研究会の成果として高峰武編（水俣病研究会）『８つのテーマで読む水俣病』（2018 年、弦書房）を刊行した。また、若手の研究者・人材育成を含む成果としては、有馬澄雄責任編集（水俣病研究会）・慶田勝彦・香室結美・松永由佳・佐藤睦・中山智尋共編『水俣病 Y 氏裁決放置事件資料集：メチル水銀中毒事件における救済の再考にむけて』（2020 年、弦書房）を刊行した。国際化に関しては、2019 年 11 月にカナダで開催されたアメリカ人類学会（AAA）で文化遺産に関する口頭発表を行い、予定していた米国マサチューセッツ大学ボストン校との研究連携を推進した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 慶田勝彦	４．巻 81（4）
２．論文標題 資料と通信 研究室紹介(2)熊本大学文学部・慶田研究室 ： 節合する人類学的読書経験への誘い	５．発行年 2017年
３．雑誌名 文化人類学（日本文化人類学会）	６．最初と最後の頁 704-707
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14890/jjcanth.81.4_704	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 Keida Katsuhiko
２．発表標題 On Ethnographic Allegory through the Repatriation Story of Stolen Vigango (Mijikenda Memorial Statutes in Coastal Kenya) in the Postcolonial World
３．学会等名 The Annual Meeting for AAA/CASCA in Vancouver, Canada From November 20-24, 2019（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 慶田勝彦
２．発表標題 20世紀人類学のアフターライフ
３．学会等名 国立民族学博物館共同研究会「政治的分類――被支配者の視点からエスニシティと人種を再考する」
４．発表年 2017年

１．発表者名 Keida Kastuhiko
２．発表標題 The Sacred Kaya Forests as the Mijikenda Archives along the Kenyan Coast
３．学会等名 ACHS 2020 FUTURES - Association of Critical Heritage Studies 5th Biennial Conference(online)（国際学会）
４．発表年 2020年

〔図書〕　計3件

1．著者名 有馬澄雄（責任編集者）、慶田勝彦、香室結美、松永由佳、佐藤睦（共同編集者）	4．発行年 2020年
2．出版社 弦書房	5．総ページ数 232
3．書名 水俣病〉Y氏裁決放置事件資料集 メチル水銀中毒事件における救済の再考にむけて	

1．著者名 高峰武（編）	4．発行年 2018年
2．出版社 弦書房	5．総ページ数 232
3．書名 8つのテーマで読む水俣病	

1．著者名 富樫貞夫	4．発行年 2017年
2．出版社 弦書房	5．総ページ数 240
3．書名 〈水俣病〉事件の61年《未解明の現実を見すえて》	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	富樫　貞夫 (Togashi Sadao)	熊本大学・法学部・名誉教授	水俣病研究会。法学からの協力者。

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	有馬　澄雄 (Arima Sumio)		水俣病研究会。事件全般、特に医療社会史に詳しい協力者。
研究協力者	高峰　武 (Takamine Takeshi)		元熊本日日新聞社、水俣病研究会。事件に詳しいメディア関係からの協力者。
研究協力者	香室　結美 (Kamuro Yumi) (40806410)	熊本大学・文書館・研究員（特任助教） (17401)	文化人類学、学芸員。アーカイブズ関係の主たる研究協力者。水俣市水俣病資料館、水俣病を語り継ぐ会、相思社、ガイアみなまたとの研究連携がある。
研究協力者	下田　健太郎 (Shimoda Kentarou) (90823865)	熊本大学・大学院人文社会科学研究部附属国際人文社会科学研究センター・准教授 (17401)	文化人類学、＜水俣病＞地域研究。本願の会との研究連携がある協力者。慶応大学→熊本大学（2021）
研究協力者	牧野　厚史 (Makino Atsushi) (10359268)	熊本大学・大学院人文社会科学研究部（文）・教授 (17401)	地域社会学、環境社会学。博物館実務経験がある協力者。
研究協力者	伊藤　洋典 (Ito Hironori)	熊本大学・大学院人文社会科学研究部（法）・教授 (17401)	政治学。石牟礼道子資料保存会、マサチューセッツ大学ボストン校との研究連携がある協力者。
研究協力者	鈴木　啓孝 (Suzuki Hirotaka) (20803711)	熊本大学・大学院人文社会科学研究部（文）・准教授 (17401)	歴史学、近代思想。韓国東義大学との研究連携がある協力者。
研究協力者	向井　良人 (Mukai Yoshito) (50315280)	熊本保健科学大学・保健科学部・准教授 (37409)	社会学。水俣病研究会、相思社、水俣フォーラムとの研究連携がある協力者。

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	青木　恵理子 (Aoki Eriko) (40180244)	龍谷大学・社会学部・教授	文化人類学。関西地区からの連携研究者。
研究協力者	吉永　利夫 (Yoshinaga Toshio)		ミナコレ、水俣病を語り継ぐ会。世界記憶遺産関連の協力者。
研究協力者	飯田　卓 (Iida Taku) (30332191)	国立民族学博物館・学術資源研究開発センター・教授	博物館、文化遺産、人類学。国立民族学博物館および無形文化遺産関係の協力者。
研究協力者	パーキン　デヴィッド (Parkin David)	オックスフォード大学・オール・ソウルズ・カレッジ・名誉教授	社会人類学者、元社会・文化人類学研究所所長（オックスフォード大学）。海外研究者との連携、国際セミナーや各種英語ジャーナル投稿等に関する特別アドヴァイザー的な協力者。

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関